英語教職コアカリキュラムである「異文化交流」の実施にむけて

英語教職希望者と異文化交流の実態および可能な対応策

花﨑 美紀（信州大学学術研究院　人文科学系）
花﨑 一夫（信州大学学術研究院　総合人間科学系）

1. 英語コアカリキュラムに求められる、英語教員の素質

平成 31 年から完全実施される新指導要領にあわせて、教職課程を擁する大学において何を教えるべきかの指針が示された。その中で、外国語（英語）は、ますます国際化する世界に対応し、また、喫緊の問題としては、2020 年に行われる東京オリンピックの際に外国人が多く来ることに対応するべく、英語の教職課程で教えるべき科目、すなわちコアカリキュラムが 2017 年度中に制定される予定である。平成 29 年 5 月 31 日に文科省から示された「外国語（英語）コアカリキュラム案」（以下、英語コアカリキュラム案）では、中・高等学校教員養成課程においては、以下のカリキュラムを含むことが求められている。

(1) 英語カリキュラムの中に含まれるべき学習項目

（１A）英語科指導法

①学習指導要領
②教科用図書
③目標設定・指導計画
④小・中・高等学校の連携
⑤聞くことの指導
⑥読むことの指導
⑦話すこと（やりとり・発表）の指導
⑧書くことの指導
⑨領域統合型の言語活動の指導
⑩英語の音声的な特徴に関する指導
⑪文字に関する指導
⑫語彙・表現に関する指導
⑬文法に関する指導
⑭異文化理解に関する指導
⑮教材研究・ICT 等の活用

⑯英語でのインタラクション
⑰ALT 等とのティームティーチング
⑱生徒の特性や習熟度に応じた指導
⑲学習到達目標に基づく授業の組み立て
⑳学習指導案の作成
㉑観点別学習状況の評価、評価基準の設定、評定への総括
㉒言語能力の測定と評価
㉓第二限言語習得に関する知識とその活用

（１B）英語科に関する専門的事項
①聞くこと
②読むこと
③話すこと（やりとり、発表）
④書くこと
⑤領域統合型の言語活動
⑥英語の音声の仕組み
⑦英文法
⑧英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語
⑨文学作品における英語表現
⑩文学作品からみる多様な文化
⑪英語で書かれた代表的な文学
⑫異文化コミュニケーション
⑬異文化交流
⑭英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化

（文部科学省（2017））

本稿は、今後、コアカリキュラムとして扱うべき事項の一つとして示された「異文化交流」をいかに行うことができるかを示すために、「異文化交流」に対応すると考えられる、これまで信州大学において行われてきた取組を紹介し、その問題点を明らかにすると同時に、それらの問題に対応する可能な対応策として、マレーシア・プトラ大学との協定のもとで行われる短期語学研修について、論じたい。

２.「異文化交流」で求められるものとは

「異文化交流」は、コアカリキュラムの中の「異文化理解」という大枠の中で学習されるべき項目の一つである。「異文化理解」という大枠の目標として、英語コアカリキュラム案は以下のように述べている。

(2) 「異文化理解」の全体目標

社会や世界との関わりの中で、他者とのコミュニケーションを行う力を育成する観点から、外国語やその背景にある文化の多様性および異文化コミュニケーションの現状と課題について学ぶ・併せて、英語が使われている国・地域の文化を通じて、英語による表現力への理解を深め、中学校および高等学校における外国語科の授業に資する知見を身につける　（文科省　2017）

そしてその学習項目を実施する具体的方策として、「文部科学省委託事業　英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業　平成 28 年度報告書」は、以下のように、述べている。

(3) 「異文化交流」の実施具体案

異文化コミュニケーション能力を身につけるためには、座学だけではなく、様々な文化的背景を持った人々と実際に交流する機会を持つことが肝要である。長期・短期の留学が難しい場合でも、交換留学生、他大学の交換留学生、近隣に居住・勤務している外国人などとの交流を持つ機会を提供することが求められる。インターネットを利用して、テレビ会議、電子メール、SNS によるやりとりなどを行う事も考えられる。　（「文部科学省委託事業　『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成 28 年度報告書」　2017：116）

つまり、「異文化交流」は、コアカリキュラムの一つの大枠である「異文化理解」の中で、座学の部分である「異文化コミュニケーション」とは切り離された、実際に、英語圏出身の方々との交流をすることが求められており、その具体的な策として、以下の３つがあげられていると言えよう。

(4) 「異文化交流」の実施具体案

（A）長期・短期留学

（B）留学生や近隣に居住する外国人との交流

（C）インターネット等を利用して、海外に居住する方々との交流

３．信州大学における「異文化交流」に対応できる実績およびその問題点

本章では、前章で明らかとなった、「異文化交流」の３つの具体案に対応できる実績が、信州大学において行われているかを検討する。

３．１．長期・短期留学

信州大学において、２つの留学の可能性がある。一つは交換留学、もう一つは私費留学である。交換留学とは、信州大学が提携している海外の大学に留学し、そこで勉学を積み、そこで履修した単位は、信州大学の単位に読み替えられる。一方私費留学は、外国にある語学学校に留学したり、海外インターンシップ等に参加したりすることが含まれる。この場合、信州大学の専門課程の単位として読み替えることはできない。[1]　コアカリキュラムの「異文化交流」として認めるためには、専門課程の単位として認められる必要があるため、私費留学等はコアカリキュラムに対応しうる対策としては認められない。

英語教員免許を排出する信州大学人文学部において、交換留学がどれくらい行われており、その中で、英語教職を目指している学生がどれほどいたかを表すのが表１である。

表1　信州大学交流締結校への本学学生の留学

（カッコ内の数は、うち教員免許申請者数）

	2012（H24）年度	2013（H25）年度	2014（H26）年度	2015（H27）年度	2016（H28）年度	2017（H29）年度
ラ・ロシェル大学（フランス）			1	2	2	
リール第一大学（フランス）				2		
マンハイム大学（ドイツ）						
光云大学校（韓国）						
カトリック大学校（韓国）		1				1
建国大学校（韓国）						
崇實大学校（韓国）						1
順天大学校（韓国）						
江原大学校（韓国）						
蘇州大学（中国）						1
カトリック大学ルーヴェン（ベルギー）	2(1)	2			1	
カムチャツカ国立教育大学（ロシア）						

[1] 一定の条件を満たせば、教養科目の「国際教養」として単位を認められることもあるが、教養科目であるために、教職に必要な単位として換算することはできない。

ライプツィヒ大学（ドイツ）	1		3	1	2	2
ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学（イタリア）			1	2		
北京外国語大学（中国）		1		1		
同済大学（中国）				1		
オクラホマ州立大学（アメリカ）	1		1		1	
カリフォルニア州立大学チコ校（アメリカ）			1	1	1	
ユタ大学（アメリカ）		1				
南オレゴン大学（アメリカ）	1	2(2)		1		
ゾイド大学（オランダ）				1	2	
ワルシャワ大学（ポーランド）			2	1		
マラヤ大学（マレーシア）	2		1			
輔仁大学（台湾）					1	
バス・スパ大学（イギリス）					1	
計	7（1）	7（2）	10	13	11	5

表１をみて明らかな通り、英語教職を目指している学生の中で交換留学に行っている学生は、過去 6 年間に 3 人のみと、非常に少ないことがわかる。特に、毎年 10 名程度の卒業生が英語教員免許を取得することを鑑みると、非常に少ないといえるであろう。

一方、学部が扱う数字としては表れないが、筆者が教える英語学を専攻している学生のなかで、私費留学を行うものと、その中における英語教職を履修している学生の割合を表したものが表２である。何年に留学したかではなく、何年に卒業した学生かによって集計を行った。平成 29 年度のみ、まだ卒業生がいないので、この年のみ今年度に留学している学生を集計した。[2]

[2] 私費留学については、統計がないために、筆者の記憶や残っているデータからの抽出となったため、概数である。

表２　英語学専攻学生の私費留学者数

（　（　）内は、そのうちの教職志望者）

	2012 (H24) 卒業	2013 (H25) 卒業	2014 (H26) 卒業	2015 (H27) 卒業	2016 (H28) 卒業	2017 (H29) 年度
アメリカ	1（1）	1	4	7	3（2）	3（3）
オーストラリア	1（1）	2(2)	1	1（1）	0	2（2）
その他			1	2（1）	1	

本来「異文化交流」に対応すべき、交換留学に参加する教職希望者が極端に少ない理由はいくつか考えられるが、以下のことがあげられるであろう。まず 1 点目として、交換留学は費用がかかるという点が挙げられよう。交換留学は国際交流を締結している姉妹校同士で学生を交換するプログラムであるので学費等はかからないが、その留学中はアルバイト等がほとんどできず、生活費を用意して渡航しなければならない。一方で、私費留学の多くは、インターンシップやワーキングホリデーに行った学生数であるが、彼らは、渡航先でアルバイトをしたり、生活費の補助をうけたりすることが可能であるため、教職希望の学生も、留学はしたいものの、一度に大金を用意できないために、私費留学を選んでいるという現実があると言えよう。2 点目として、英語圏にいける交換留学が少ないことがあげられよう。表 1 にある通り、信州大学人文学部からは、この 6 年間の間に、２５校に交換留学に行った実績があるわけであるが、そのうち英語圏であるのは 6 校のみであり、その 6 校にいくことができる学生数は、全学で延べ 10 名強である。となると、狭き門となるのは必須である。3 点目には、大学生の中には、長期留学はハードルが高いと感じる学生がいるのも事実であろう。中には、家族の事情で長期間日本を離れることはできないという学生がいることも事実である。

よって、交換留学にいく学生の数およびその内にしめる教職希望の学生数、また、それを私費留学のデータと比較して、「異文化交流」を交換留学によって対応する事は、次の 3 点の問題点を内包すると言えよう。

(5) 交換留学によって、「異文化交流」に対応する際に考えられる問題点

(a) 費用の問題

(b) 行くことのできる学校、人数が少ないという問題

(C) 長期留学であるという問題

３．２．留学生や近隣に居住する外国人との交流

「異文化交流」を行う第 2 の具体案として、（４B）留学生や近隣に居住する外国人との交流というのがあげられている。これに対応しうる一つの案が、人文学部が平成 23 年度の後期から開催している、多文化交流サロンである。信州大学人文学部では、平成 23 年より学生の外国語能力を高め、海外に興味をもってもらうために、各種外国語サロン（英語、フランス語、ドイツ語、平成 26 年度より中国語）を行うと同時に、各国出身のゲストスピーカーをお呼びし、その国についての講演をしていただくという機会を設けている。

表３外国語サロンの開催

種別	H22	H23	H24	H25	H26	H27[3]
各種外国語サロン		３カ国語	３カ国語	３カ国語	４カ国語	４カ国語
多文化交流サロン		（後期より開催）13 回	14 回	15 回	9 回	

（信州大学人文学部　現況調査表 2015）

多文化交流サロンの講師として来ていただいた方々の出身国は多様であり、一例をあげると、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどの英語圏もあり、また、フランス、南アフリカ、チュニジア、ネパールなどの国々もあった。一番最近では、平成２９年度 5 月にブータンに関する講演が行われた。

またそれと並行して、大使館ツアーというのも開催されている。一番身近な外国である駐日大使館を訪問し､外国に興味をもつきっかけとなるように意図され､実施されている。

これらは､「（４B）留学生や近隣に居住する外国人」　に対応する方策としてあげることもできようが、この方策も、教職のコアカリキュラムに対応させるには困難を伴う。まず第 1 に、コアカリキュラムとして対応させるためには、授業の単位を出し、履修したことを証明することが必要であろうが、今現在、これらの外国語サロンは授業化しておらず、興味のある学生にむけての単発セミナーの形で開催されている｡また第 2 の問題点として、コアカリキュラムの一部として授業として開講されるからには、成績評価を伴わなくてはならないが、講演を聴くだけでは、成績評価を伴うことが困難である。

2 つめの案としては、人文学部に在籍する留学生を参加させ、授業を開講するという案もあるであろう。しかしながら、表４が人文学部に在籍する留学生数である。全員が語学教育や英語教職学生との交流を望んでいないであろうことを加味すると、とてもこの学生達を利用し、留学生との交流をはかることができるとは思えない。

[3] 2015 年の現況調査であり、2015 年途中で提出したために、多文化交流サロンの回数は、提出時点では未確定であったため、空欄。

表４　人文学部に在籍する留学生数

	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年
在籍留学生数	8 名	5 名	4 名

よって、人文学部で開催している外国語サロンや、人文学部に在籍する留学生との交流によるコアカリキュラムにおける「異文化交流」の実施は、難しいのが現状と言わざるをえない。

３．３．インターネット等を利用して、海外に居住する方々との交流

この方策に関しては、学生全員で使うインターネット環境や、恒常的にこのシステムを構築するための相手先との協定等が必要と思われるが、そのようなものは現状ではないため、この方策をとるのは非常に困難であると思われる。

３．４．信州大学人文学部において「異文化交流」を行う際の問題点

本節では、「文科省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成 28 年度報告書」において提唱された、「異文化交流」を実施するための 3 つの方策について、現状、信州大学人文学部において行っている取組で対応することができるかを検討した結果、どれも対応できるとは言い難く、新しい方策が必要であるということが明らかになった。本節において現状行われている取組を概観し、それぞれの取組が抱える問題点をまとめると、以下の点が課題と思われる。

(6) 現状の取組が抱える課題
- (a) 費用の問題
- (b) 行くことのできる学校、人数が少ないという問題
- (c) 長期留学であるという問題
- (d) 単位化、成績処理の問題
- (e) 恒常的に行うための連携協定

よって、新しい取組は、次節では、上記５つの課題を克服できるような取組を提示する。

４.「異文化交流」を実施するためのプログラムとして、マレーシア・プトラ大学における語学研修

上記の(6)のすべての課題を解決しうる方策として、本稿では、２０１７年に行う、マレーシアのプトラ大学での短期語学留学プログラムを提唱したい。

新たに連携協定を結ぶ(6e)となると数年間はかかるということを鑑み、また費用がハードルにならないよう、なるべく安価に(6a)と考え、もうすでに姉妹校協定を締結しているア

ジア圏の大学で、英語が使われている国にある大学に白羽の矢をたて、マレーシア・プトラ大学における語学研修を考案した。

マレーシア・プトラ大学（UPM）は、１９３１年に農科大学として創設されたマレーシアの総合大学であり、農学、獣医学、医学、工学、教育各分野の教育研究を網羅する高等教育機関として中心的な役割を担っている。農業系単科大学が前身であるため、首都クアラルンプール南部郊外に広大な敷地を有し、その広さはアジアでも有数である。現在は 16 学部、学生数 3 万人、職員数 1 千人の総合大学で、マレーシア国内はもとより国際的な評価も高い。タイムズ紙によるランキングによると、世界 600-800 位にある大学とされている。また、マレーシア・プトラ大学の教育は、アジアでは珍しく英語で行われていることから、研究者、学生の派遣や受け入れが活発に行われている大学でもある。

UPM にある語学センター（ELS）は、ベルリッツ方式で、レベル別に、上は IeLTS8.0 を目指すレベルから、下は英語を始めたばかりの単数複数の違いから教えるクラスに分かれる。そして、週に 5 日語学研修をうけることができる。

ここに 1 か月程度学生を派遣すれば、上記の（６）の課題をすべて解決できるプログラムを作ることができる。(6a)費用のことに関しては、格安で 1 か月プログラムを作成し、（寮費込みで、約 6000RM（約 15 万円））、(6b)人数に関しては、20 名程度を派遣でき、(6c)海外にあまり行ったことのない学生にとっても短期であれば、それほどのハードルには感じず、(6d)協定締結校であるので単位化することが容易であり、(6e)すでに締結のある大学であるので、新たな提携締結が不要である。

そこで、2017 年の夏休み期間中に、この UPM の ELS への一か月プログラムを実施することとなった。

プログラムの交渉等は、2016 年度の夏から始められ、2016 年の夏に、筆者ら二人が UPM の ELS を訪問し、学生を送る可能性について話しあいを持った。そして、2016 年の 10 月には、テストケースとして、人文学部の学生が、一人で UPMELS に語学留学を行った。その語学留学の成功を受け、夏のプログラムを考察し、下のような授業開講予定にまとまった。

図１　2017 年　UPM ELS における 1 か月語学研修プログラム　カリキュラム案[4]

SHINSHU UNIVERSITY, JAPAN

AUGUST / SEPTEMBER 2017 SESSION
(AUGUST 14, 2017 – SEPTEMBER 15, 2017)

WEEK / DAY	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY		SATURDAY	SUNDAY
	2017/8/7	2017/8/8	2017/8/9	2017/8/10	2017/8/11		2017/8/12	2017/8/13
	8:30AM-10:00AM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-10:00AM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 2 2017/09	STUDENT IN HOME COUNTRY	STUDENT IN HOME COUNTRY	STUDENT IN HOME COUNTRY	STUDENT ARRIVAL	REGISTRATION AT UPM ID 10:00AM-12:00PM CIEP PLACEMENT TEST	FREE	VISIT PUTRAJAYA & MALACCA	FREE
	2017/8/14	2017/8/15	2017/8/16	2017/8/17	2017/8/18		2017/8/19	2017/8/20
	8:30AM-10:00AM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-12:40PM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 3 2017/08	CIEP CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS	FBMK CLASS	VISIT ELEPHANT SANCTUARY @ KUALA GANDAH, PAHANG	FREE
	2017/8/21	2017/8/22	2017/8/23	2017/8/24	2017/8/25		2017/8/26	2017/8/27
	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	7:00AM-5:00PM	8:30AM-12:40PM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 4 2017/09	CIEP CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS 4:00PM-6:00PM FBMK CLASS	VISIT EDU PARK, UPM	CIEP GRADUATION (2017/08)	FBMK CLASS	FREE	FREE
	2017/8/28	2017/8/29	2017/8/30	2017/8/31	2017/9/1		2017/9/2	2017/9/3
	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-12:40PM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 5 2017/08	SESSION BREAK			NATIONAL DAY PUBLIC HOLIDAY	HARI RAYA HAJI PUBLIC HOLIDAY	SESSION BREAK		
	2017/9/4	2017/9/5	2017/9/6	2017/9/7	2017/9/8		2017/9/9	2017/9/10
	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-12:40PM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 1 2017/09	CIEP CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS 4:00PM-6:00PM FBMK CLASS	CIEP CLASS	CIEP CLASS	FREE	BACK TO NATURE JUNGLE TREKKING @ FRIM, KEPONG	FREE
	2017/9/11	2017/9/12	2017/9/13	2017/9/14	2017/9/15		2017/9/16	2017/9/17
	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-3:30PM	8:30AM-2:30PM	8:30AM-12:40PM	2:30PM-4:30PM	8:30AM-5:00PM	8:30AM-5:00PM
WEEK 2 2017/09	CIEP CLASS	SHINSHU UNIVERSITY'S STUDENTS GRADUATION	STUDENT DEPATURE	FREE	FREE	FREE	MALAYSIA DAY PUBLIC HOLIDAY	FREE

本プログラムの特徴は以下である。まず 1 点目として、ただ単に語学のプログラムに終わらないように、UPM の大学の授業を聴講できるように（水曜午後および金曜午後）プログラムされている。(FBMK とは、Faculty of Modern Language and Communication の略称　ここで、マレーシア・プトラ大学の文学部の授業を受講することになっている）2 点目として、マレーシアの文化も学べるようにプログラムされている。(4 回のフィールド旅行）そして、3 点目としては、到着の次の日にプレイスメントテストがあり、日本人だけのクラスができないよう、レベル別に、既存のクラスに入るようにプログラムされている。

5 月 31 日締め切りで募集をかけたところ、23 名の学生からの応募があり、実施することが決定した。

５．まとめ：本プログラムが期待する効果

2016 年の 10 月より、パイオニアケースとして、UPM の ELS に留学した学生からは、本プログラムについて、以下のようにレポートされた。

[4] 短期語学研修については、まだ調整が続いている点もあり、カリキュラム案は、2017 年 5 月末時点での、暫定案。

(7) 生徒 S による UPM　ELS についてのレポート

（A） よかった点

・マレーシア人の国民性がとてもやさしい

・先生がとても熱心　授業後に 3 時間も会話練習に付き合ってくれたこともあった

・先生がネイティブスピーカーでないため、非ネイティブがどうやって説明されるとわかりやすいかを心得て教える

・授業は会話中心で行われる。

・ムスリムの文化を肌で感じることができる

・なにしろ、生活費が安い

（B） 改善が必要と思われた点

・アラブ人が多い

・クラスレベルが 106 というクラスまでは 1 か月で自動的に上のクラスに入ることができるため、105 以下のクラスでは少し緊張感が少ない

・蚊の対策が必要

少し改善したらいいことが挙げられていたが、それを上回る良い点が挙げられており、彼自身も、「苦労した点もありましたが、総合的にみて僕は UPM の ELS に留学してよかったと感じています」とレポートしていることから見ても、いいプログラムであったといえるであろう。

2017 年から行われる、プログラムにおいて、我々筆者たちが期待することは以下である。まず 1 点目として、英語学習が促進されること。特に、S 君のレポートもあった通り、学習者および教育者がネイティブスピーカーではないことが大いに刺激になるであろうと思われる。同じアジア人でも、英語によってコミュニケーションがとれること、また、彼らの頑張りを見ることが大いに刺激になるであろうと期待している。2 点目として、Melting Pot と呼ばれる多様性が非常にある国マレーシアにおいて、多様性とは何かを感じてほしいと期待している。3 点目としては、外国人とのコミュニケーションを実際に行い、「異文化交流」を肌で感じてきてほしいと願っている。

参考文献

文部科学省（2009）．高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編 開隆館出版株式会社

文部科学省（2016）『外国語ワーキンググループ資料６』文科省 HP

文部科学省委託事業（2017）　「文部科学省委託事業　『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成 28 年度報告書」

文部科学省（2017）「外国語（英語）コアカリキュラム案」文科省 HP

信州大学人文学部(2015)　「現況調査表 2015」